
寒さ嫌いの氷魔術師

カフェイン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

寒さ嫌いの氷魔術師

【Nコード】

N8129Z

【作者名】

カフェイン

【あらすじ】

得意な系統が氷であるのに寒いのが嫌いというなんかずれた少年、氷村正人。

そのギャグみたいな人柄とは裏腹に重い過去を背負っている彼は、紅魔法学校でどのようにすごしていくのか。魔法が使える世界での学園ストーリー

プロローグ スベテノハジマリ

「はあ、はあ、はあ・・・」
自分の声も聞こえなくなるような豪雨の夜、少年は逃げていた。
幸いにも、この豪雨のおかげで足音も声もかき消されている。
決してあてがあつて走っているわけではなかった。

- 死にたくない -

その願いだけが少年の体を動かしていた。

いったいどれほどの時間を走り続けたのだろうか。

一時間、一分、一秒

迫りくる恐怖により時間の感覚さえ分からなくなってきていた。
どうしてこんなことになってしまったのだろうか。
つい数十分前までは、大好きな家族とともにいつもと変わらず過
していた。

父と、母と、幸せな時間を過ごしていたのだ。

あの黒服の奴らが来るまでは。

突然、家の玄関が物凄い音を立て、吹っ飛んだ。

父はこのあたりでは一番の魔術師であり、国直轄の魔法防衛軍の小
隊長だったので

一直線に玄関へ飛び出していった。
母は急いで少年をかつぎあげ二階の部屋に逃げ込んだ。
9歳の少年にはいったい何がおこったのかわからなく、
母に聞いても「私達がぜつたいに守るから、大丈夫よ」としか言わ
ない。
母がそういうなら大丈夫というなら大丈夫なのだろうと納得しよう
としたとき、

「我らはロミスオンだ！」

その声を聞いたときの母の顔は頭から離れない。
恐怖と絶望が入り混じったような顔をしていた。

それを聞いた後の母は少年に話すひまさえ与えないほど素早くを自
らの血で

魔法陣を書き、何らかの呪文を唱えはじめる。

すると、少年の足元にも同じ模様の魔法陣が現れ激しい光を放つ。

「いったい何がおこってるの!？」

ついに耐え切れず少年は母に問いかけた。

少し寂しそうな表情をしたが、すぐに微笑み

「これからあなたはつらい人生をいくことになるかもしれない。そ
れでも、決して

下を向かず歩き続けなさい。」

と言い、自分のつけていた十字架のついたネックレスを少年に渡し
た。

その時、部屋の扉が黒服の男たちによって破られた。

「じゃあね、必ず逃げて生き延びなさい」

それが最後に聞いた母の言葉だった。

あの黒服の男たちはいつたいなんだ

- ロミスオン - ってなんだ

そんなことを思いながら視界は真っ白に染められていった。

「ここは、外なのか」

さっきの魔法陣は移転魔法のものだったらしく、家の近くの公園に移転されていた。

しばらくの間呆然としていたが、すぐに走り出した。

母の言葉を思い出したからである。

少年の予想通りに遠くから「早くあのガキを捕まえる」という声が聞こえてくる。

少年はひたすら逃げた。どこへ、わからない。ただひたすら遠くへ。いったいこの先どうすればいいのか、わからない。何もわからない。

わかっていたのは逃げなければならない、それだけだった。

プロローグ スベテノハジマリ（後書き）

いきなりシリアスですいません。

どうも、どうも、カフエインと申します。

完走めざしてがんばります。

プロローグの後だけど・・・はじめに

どうも、この度初めて小説を投稿しましたカフェインと申します。
こんな新人ですがこれからも読んでいただけたら嬉しいです。

さて今回は「寒さ嫌いの氷魔術師」の舞台設定を書こうと思います。
どうも、自分の力量じゃ小説内ではうまくかけそうにないもので・・・
では、どうぞ。

舞台設定

この小説の主人公が暮らしている世界は簡単に言うと、魔法が存在するのだけが違いの日本の平行世界のようなものです。
なので、基本人の名前は漢字です。決して欧風の名前が思い浮かばなかったのではないですよ（焦）

魔法について

魔法は基本属性の、火炎、水氷、雷鳴、風雲、大地の五属性と光陽

と闇陰の特殊二属性

から成り立っており、五属性ならば努力しようと思えばすべての属性を使うことができる。

ただし、特殊二属性は片方しか使うことができない。

別に闇陰属性は禁忌などではない。

ほとんどの魔法は一行程度の詠唱を唱えるが、無詠唱やかなり長い詠唱を使うこともできる。

しかし、その分多くの魔力を消費する。

二つ同時に使うこともできるが（これを二重魔法デュアルマジックという）

やはりその分多くの魔力を消費する。

主人公、氷村正人ひむらまさとについて

詳しいことはこれから書いていきますが、特徴的なのは・・・

- 1 冬、ていうか寒い嫌い
- 2 水氷属性が得意
- 3 基本Sかつっこみ担当

です。

これ以上はネタバレになるので・・・

学校について

紅魔法高等学校はで1〜12組までわかれている。

2・8組が火炎、3・9組が水氷・4・10組が雷鳴、5・11組が風雲・6・12組が大地を得意と

するクラスになっており、1・7組はすべての属性をある程度は使えるという組である。

各属性とも数字が低いクラスのほうがレベルが高い。

という感じですよ。

少しでも皆さんが楽しんでくれる小説を書くよう努力します。
それでは、本編で

新学期 まだ少し寒いこの頃

あれから7年過ぎたある朝

寒い季節の朝というのはほんとうにつらい。

起きなければならぬとわかっていながらも布団を離すことができない。

最近では少し暖かくなってきたのだが、朝はやはり寒い。

「・・・・・・・・・・いつ、・・・・・・・・く・・・・・・・・ろ」

もとより寒いのが嫌いな俺、氷村正人にとって、自分からこの布団エの中からでるのはかなりつらかった。

はあ、新学期なんてほとんどなにもしないようなもんだから10時ぐらいに登校だったらしいのに

「はや・・・・・・・・・・言って・・・・・・・・遅れ・・・・・・・・」

そうだ、どうせ宿題を提出するぐらいだから10時でも問題ないじゃない。

ほら、寝る子は育って言うし。絶対おそいほうがいいって。

「いいかげ・・・・・・・・きる・・・・・・・・最しゅ・・・・・・・・く・・・・・・・・」

そつえば、さっきから周りがうるさいな。

人が気持ちよく寝てるときになんだってんだよ。
はあ、そろそろ起きるか・・・

と思い顔を上げると

目の前にピシッドロシッピをくわせおじつしている姉がいた。

「まだ腹が痛え・・・」

そう言いながら、パンを食べる。ちなみに、俺はなににもつけないのが好きだ。

バターとかジャムとか意味わからん。

「あんたが起きないのが悪いんでしょうが」

そう言いつつパンをたべるのは俺の1つ上の姉の氷村葉月。

ちなみに、パンにはチョコレートクリームを塗っている。

っていうか姉よ、あんたは弟が起きなかつたらヒップドロップをしますのか

年頃の女がなにやってんだよ

「正人は昔から寒いのが苦手だからなあ」

と、父の氷村賢治がのんびりつぶやく。

父さん・・・そんなことより、まず姉さんの暴挙はスルーなのか。

「いやー、なんだかんだと言っていつも通りだからなあ」

・・・ちよつとまで。いろいろとつつこみたいが俺は言葉に出した覚えはないんだが。

心をよんだのか？

「もー、ちゃんと叱らなければだめでしょ、あなた」

そう言いながら次々と皿を素早く洗うのが母の氷村奏。

母さんは比較的常識人なんだけど、いろいろと人外なんだよな・

・

えっ、どんなところが人外だった？

あそこで残像ができるくらいのスピードで皿を洗いながら喋ってるのを見るとわかるよな

もう気づいてる人もいるかもしれないけど、表記が姉さん、父さん、

母さん、と」義」という文字がついてないのだ。

7年前、正人の本当の両親の平木直人と平木彩音は死んだ。
いや、殺された。

あの豪雨の夜、ついに力尽きた正人は路上で倒れてしまった。

その倒れたところが、この氷村家の前だったのだ。

次に目を覚ましたのが氷村家のソファの上だった。
ここがどこかもわからず困惑していると、

「おっ、目が覚めたみたいだな」
とのんびりした口調で話しかけてきた。

「……」は

「氷村家だ。ついでにいうと俺は氷村家頭首の氷村賢治だ、なんつってな」

今思えば、あれは俺が話しやすいようにする気遣いだったのだろう。

「家のまえで倒れてたけど、なにかあったのか」
正人は何も言わなかった、いや言えなかった。

「言えない、か。家族はどうした」
そう聞かれてはつとした。

思い出したのだ、あの夜の出来事を。

こらえきれず、すすり泣きながら
「たぶん………殺……された」
と言つと

「何っ………そうか、嫌なこと思い出させてごめんな」
と言つて正人の頭を撫でた。
とても優しい手だった。
正人は泣いた。ただただ叫ぶように泣いた。
賢治は何も言わず頭を撫で続けていた。

しばらく泣いた後、賢治は

「お前、どこか行くあてはあるのか」と聞いてきた。

もちろん9歳の正人に行くあてなんか知るはずもなく首を横に振るしかなかった。

すると、次には驚くべき言葉が返ってきた。

「よし、じゃあ俺と家族になろう」

意味が分からないと思ったのが本音だ。それもそのはず、あつて数分しかしてない見ず知らずの男にいきなり家族になろうと言われても驚くだけだ。

「……どういう意味」

「そのままの意味だ、戸籍上、養子ってことになるが気にしなくていいぞ」

「そういう意味じゃないつ。どうして会ったばかりの子どもにそんなことを言っ」

正人はつい叫んだ。

「困ってる人がいれば手を差し伸べれる人になりなさい、ってのが俺の父のことばでね
俺はそれをじっこうしているだけだ。もっとも今度は規模がちがうけどな」

言葉が出なかった。

同時に偽りの優しさではなく、本当に心から優しい人なんだと理解した。

「で、家族に家族になるのか、ならないのか」と微笑みながら聞いてくる。

「でも、いいのか、僕みたいな知らない人を家族になんて」

「さっきからいっていつてんだろ」

心が揺らぐ。

「でも、あなたの母さんや子どもには迷惑じゃないの」

「そんなこと説明すればいいだけじゃねえか」

また心が揺らぐ。

「でもっ・・・僕、寒い嫌いだし、朝とか起きられないよ」

「面白いやつだな、お前。朝ぐらい起こしてやるよ」

そして優しく

「これからは俺がおまえの父さんになってやるよ」
と言った。

我慢できずついに飛びついてしまった。

こついう感じで俺は氷村正人となりこの家族の一員となった。

みんな、本当の家族のように接してくれるので俺は義父さん、義母さんとは呼ばないのだ。

やべっ、いろいろ思い出してるうちにもうこんな時間になっちゃった。
急がないとまずいかもな。

急いで用意を済ませ俺は学校へと急いだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8129z/>

寒さ嫌いの氷魔術師

2011年12月26日01時58分発行